

一番素敵な夏休み

シャーペンを握り締める手に汗が滲んで、すべる。

暑さにうんざりしながら、私はマフラーのように首に巻きついてくる髪を払いのけた。

「私は人見知りでなかなか周りと話せないところがあるので、次からはこの主人公のように少しずつ人と話す努力をしてみようと思いました。」

その猫に出会ったのは、読書感想文用の原稿用紙の四枚目にやっとのことでそう書き終わり、一息つこうとブラブラ外に出た時だ。

今は夏休みに入って、そろそろ三分の二を切ろうかという頃だった。

あと少して、日にちは長いようで時間は短かった夏休みが終わる。

大急ぎで読書感想文を書き上げたから、しかも私の部屋はクーラーがなくて暑いからグダグダだった。仕方がないから窓を開けても熱風が入ってくるだけで、昼間だからか風も全然涼しくない。夕方だったらもう少し気持ちいい気温になるんだろうけど、なるべく早いうちにたまった宿題を仕上げてしまいたかった。

おかげで暑くてムカムカするし、文字とずっとにらめっこしていたせいで頭もガンガン悲鳴をあげそう。外に出たのは散歩ですらなく、ただ『ちょっとその辺まで気分転換』くらい

の心づもりだ。うちは三人家族だけど、今日はお父さんが仕事で夜まで帰らないし、お母さんは用事で泊りがけ、帰ってこないから許可を取る必要もない。(もちろん鍵はかけてきた) 読書感想文はそのまま机の上に置いてきたけど、窓を閉めてるから風に飛ばされる心配もないし。

感想文の最後の一文に関しては、特に思うところはなかった。私が人見知りなのは自他共に認める事実であり、そこは間違いない。けどその後は、他に締めくくる言葉が見つからなかったのと、『私は主人公みたい人と話す努力がないので羨ましいです』だと格好悪いと言うか、読書感想文つぼくないと思ったから書いただけで、実際はそんなこと思ってない。

いや、努力しようとは思っているけど、実行したことはない。

努力しなきゃいけないんだと思うけど、いつの間にか本当に誰かと仲良くなっているの？と考えてしまうようになった。

仲良くなるってことは、別れる時が来るってことだから。

ちよっと挨拶して別れて終わり、ではなくて、長い間ずっと仲良くしてきて、アツサリ別れてしまう方が辛い。

だから、人と交流を持つと思うとすぐにためらってしまう。

それに私は元から話すのが苦手だから、相手が私の言葉を聞いて気分を害してしまうんじゃないかって思ったりもする。

故に、

「やあ、こんにちは！ そろそろお昼の時間なんじゃないのかい？」

通りがかった商店街でそんな風に魚屋の威勢のいいおじさんから挨拶されても、

「こんにちは」

とか

「もう食べたので大丈夫ですよ」

とかそんな気の利いた挨拶は出来ず、戸惑いながらチラツと軽く会釈をすることしかできない。

魚屋のおじさんは気を悪くした様子もなくニカツと笑っている。目線を外すタイミングを逃し、私もおじさんもしばらくお互いをジーツと見ていた。

けど、気まずい沈黙はおじさんによって破られる。

「あつ、こら、おい、ドラ！」

魚屋の店先に出ていた立派な魚をくわえ、ドラ猫が風のように走り去っていくのを、おじさんは長靴をはいた太い足で追いかけていった。……さすが猫だ、すでに姿は見えない。

あのドラ猫の焦げ茶の縞模様や宝石みたいな緑色の目には見覚えがある、というよりも、商店街、いやこの辺り一帯の人全員が知っている。

いつも魚屋の魚をおじさんの目を盗んでくわえ、とつとと逃げていくドラ猫だ。

目を盗んで、と簡単に書いたけど、実はそれは凄いいことだ。

あの魚屋のおじさん、小学生の時から当時は親が経営していたこの魚屋を手伝っていたという話で、その時から魚を持って行ってしまいうドラ猫は後を絶たず、その度追いかけては捕まえていたんだとか。

この辺りは田舎だけど、元は近くに大きな町があつて、そこに住んでいる人たちがこの町に猫や犬を捨てていったからやけに野生の動物が多いとか何とか。野良猫ばかりじゃなく野良犬もいるけど、犬の場合大抵小さい頃にこの町の誰かに育ててもらいペットと化すため、徘徊している野良はもっぱら猫が多い。

話を戻すと、魚の調理や会計も任せてもらえなくて店番だけだったおじさんは、大量の猫を捕まえるのに専念したので、猫が引っ掛かる罠（？）の作り方とか捕まえ方とかを熟知し

ていて、今でもこの魚屋に来るほとんどの猫はおじさんに捕まる。というか魚を盗む前に見つかる。

毎日やってきていながらおじさんに捕まらない唯一の猫であるあのドラ猫は、有名人ならぬ有名猫の肩書きを得るまでになっている。

私も登校中や下校中にこの辺りを通ると、追いかけてっこしているドラ猫とおじさんを見かけるけど、ドラ猫が逃げ切れなかったのを見たことがない。

今日もおじさんは残念そうな顔をして帰ってくるんだらうな……と考えながら、私はその場を歩き去った。

「あら、こんにちは」

歩いていると周りからそんな風に声を掛けられることもあったけど、私は明らかにそれと分かる作り笑いを浮かべてチョコンと頭を下げるくらいしかできない。

はあ、と思わずため息をついてしまう。

ほんと、我ながら不愛想な子だ。

私は一度立ち止まり、ボンヤリと空を見上げた。

真っ青に塗りたくられた空。

その青には一かけらの隙も見当たらないのに、何故だかポツカリ穴が開いているような気がしてしまう。

ギラギラした暑苦しい太陽のせいかもしれない、と思った。

空の合間にポコポコと可愛い雲が浮かんでいるけど、それで中和できるほど真夏の太陽は甘くない。

「暑いなあ……」

そろそろ帰ろうかな、と心の中で呟いた時だ。

「やあ、暗い顔してるじゃないか」

そんな声が聞こえてきた。

……あれっ、もしかして私の事かな？

二十歳から四十歳、どの年齢でもありえそうな、成人男性の声だ。

町中を歩いていて男の人から挨拶されたら、その中に一人は絶対こんな声の人がいるんだろうなっと思うような声。

でも、何だかおかしいな、と思った。

どうしてだろう。

「君だよ。振り向くくらいしても何も罰は当たらないんじゃないのかい」

もう一度声が聞こえてきて、はっきりと違和感に気づいた。

何だろう、声は分かるんだけど、聞こえない——聞こえてるわけじゃない。

響いてる、のかな。

耳の中に入って脳に送られてるんじゃないなくて、直接脳に話しかけてる感じがする。

……テレパシー、なのかな？

ここに来て、初めて私は辺りをゆっくりと見回した。

「誰……ですか？」

声の主を探しながら、慌てて敬語を付け加える。

道端のタンポポ、道路わきの雀、塀の上の猫、電柱に留まった鳥。

近くの家の二階のベランダで洗濯物を干している女の人が見えたけど、さすがに違うだろう。声を掛けてきたのは明らかに男の人だったし、この距離で話しかけられたら多少声が大きく聞こえそうなものだけど、それもなかった。

「上、上」

上？

私は顔を上げる。

真っ先に電柱、続いて家の屋根が目に入る。

空も目に入ったけどどちらかというとき背景で、あまり印象に残る感じでもない。

「上に行きすぎだよ。もっと下」

上で下、ってこと？

私は訳が分からない。

「私だよ、わ・た・し。左側を向いてごらん」

左側を見る。石塀の向こうに松の木が生えていて、和風の家が見えた。

窓枠がかるうじて塀の穴（あの辺が曲線になってるひし形みたいな穴、何て名前なんだろ

う？）から見えるけど、流石に家の中の様子までは分からない。

「上ってさっき言ったのに、どうしてそのまま左を向くのか分からないね」

呆れが混ざった声で言われ、私は視線を上げる。

パチッと目が合い、胸の奥がザワザワした。

……何だろう、ザワザワというか、落ち着かない感じがする。

ゆらりと尻尾を扉に垂らして座っている、一匹の猫。見覚えのある縞模様。

「さっきの魚屋の猫だ……」

「魚屋のって、別に私は魚屋で飼われているわけではないんだけどね」

……ん？

今の言い方、猫が話したって事？

……まさかね。

「あの、誰ですか？」

「だから私だって言ってるじゃないか、どうしてせっかく目が合ったのにそっぽ向くんかい」
今度は声がムツとなった。

「えー……っと」

私はゆっくりと視線を元に戻す。

「もしかして、猫が話した、とかないよね……？」

「あるぞ」

猫の尻尾がフワンフワンと軽やかに揺れる。

「まあ正確には話しているわけではないんだが。人間の間では超能力、と呼ばれているんだ

ったか。声で話しているわけではないから種族が違っても言葉は通じる」

次々と流れ込んでくる説明に、私は理解が遅れてしまう。

「テレパシーってこと……?」

「ああ、そう、それだ。前に会った人間も同じことを言っていた記憶がある。まあ、流石に猫と人間だと、私が一方的に話すだけでは伝わらないんだがね。猫同士であれば……:てればしい、と言ったか、それを使っても通じるが、人間でも犬でも別の種族に使えば大抵は何も感じない。『体質』を持っている君のような人種は私の言葉を聞きとれるようだが」

この辺りで、やっと私はなんとなく状況を理解してきた。

テレパシーが使える猫が、私に話しかけてきて、私はそれを人間に話しかけられたと思い込んだ、ということらしい。

それと、猫がテレパシーを使ってもほとんどの人間は気づかないことが多い。

……整理したら頭では納得できたけど、でもまだ底のところは納得してない。

猫が話すっていう、しかも普通に話すんじゃないかってテレ^超パ^能シー^カを使って話すなんて現象は、にわかには信じがたい。

……まあ、テレパシーだからこそ猫語で話されても会話が成立するんだろうけど。

「とはいえ、いくら『体質』を持っていても信じてくれる者はほとんどいないんだ。君、名前は？」

私はサツと後ずさった。

確かにテレパシーで話しかけられている実感はある。これは普通に話しかけられてる感じじゃない。でも、超能力者の人間が猫のふりをして聞いてきていたら、簡単に名前を答えるのは危ない。

それに聞きたいこともある。

「名前を教える前に、『体質』って何？」

「ああ、君には体質の事を話していなかったかな？ 文字通り私のでればしいを受け取れる体質だよ。『猫と話したいと思ってる、思ったことがある』『猫と縁がある』心当たりはないかな？」

びっくりとする。

ある、というか、もう関係ない、というか。

服の裾をきつく握った。

早鐘のように、がどんな速さか分からないけど、それ以外に表現の仕方が見つからないく

らしい勢いで、心臓が波打っている。

「あと、『超能力の欠片もち』。超能力は使えないけど、超能力者がいたらなんとなくわかったり、誰に教えられたわけでもなく超能力に詳しいとかいった人達だね」

……これにも心当たりがあった。

はつきり「超能力者だ」と分かったわけではないけど、この猫を見た時胸がざわついたのは、あれはこの『超能力の欠片』をもっていたから、ってこと？

でも、いきなり超能力だとか欠片とか言われても、実感はわからない。

「ふむ、信用されていないみたいだね。何が信用ならないんだい？」

急に尋ねられても、起きているすべての事が非現実的すぎて、何を口に出せばいいかわからなかった。

でも、今の段階で一番気にしないといけないことは、多分……。

「……猫が、テレパシーを使えるってこと、かな。あなたが本当に私にテレパシーを送ってる、証拠はあるの？」

猫は目をしばたいた。

なんだか本当に私の言葉が分かってるみたいだ。

「なるほど、まあ動物に超能力があったところで、信じられる人間は少ないだろうね。じゃあ、私が今から自分が何の動作をするかテレパシーで伝えよう。その通りの事をやってみせたら、信じてもらえるかな？」

「まあ、信じるって言ったら信じるしかないけど」

でも、どうしてそこまでして私に超能力がある事を信じさせようとするんだろう？
何か理由でもあるのかな？

「分かった。じゃあまず、前足を上げる。右側の足だ」

猫はそうテレパシーを送ってきてから、チョコンと右の前足をあげてみせた。

「次は、尻尾を左右に振るあたりでいいかな？」

ピョコンピョコンと、尻尾が揺れる。勿論左右に。

「次は時間も指定してあげよう。このテレパシーを送り終わってから五秒後に、そうだな、その松の木に飛び移ろう」

松の木を顎で指して見せてからしばらくして、猫は軽々とした身のこなしで木に飛び移った。正確な時間は数えてないけど、多分五秒くらいしてからだ。

「じゃ、堀に戻るかな」

今度は、独り言みたいでテレパシーの音が小さくなった。

続いて、猫が塀に戻ってくる。

そして呑気に尻尾を振った。

「これで信じてもらえたかい？」

「……まあ、ね」

少し迷ってから頷くと、猫も満足そうに頷いた。

「それはよかった。じゃあ、名前を教えてもらえるかな」

「……澄川」

名前も言おうかと思っただけど、考えてみたら猫がテレパシーを本当に使っていたところで、悪事を起こさない証拠はない。

テレパシーを使って、私の名前を誰かに話すかもしれないからだ。

でも、この猫は犯罪にはあまり向いてなさそうだし、澄川なんて名字は珍しくもないからそれくらいなら構わないだろう。

猫の方は、教えられたのが名字だけでも気分を悪くした様子はないようだ。

「そうか、澄川か。澄川、こちらも自己紹介したいところだけど、私には名前がないんだ。

好きなように呼んでくれて構わないよ」

「名前……」

私はじっと猫を見つめた。

猫、ねこ、ネコ。猫……。

ふいに、頭の中でこだましていた名前が、私の口を飛び出した。

小さな小さな、独り言になって。

「シューナ……」

「シューナ？」

小さな声でも、猫は聞き逃していなかった。

私は慌てて「やっぱり、違う名前にする」と取り消そうとした、けど。

猫は数回瞬きすると、口の端を吊り上げた。

「なかなかいい名前じゃないか。じゃあ澄川、これから私のことは『シューナ』と呼んでく

れ。さてと、名前が決まったところで、ちよつとついてきてくれないかい テレビ話の通じる人が

見つかったら連れて行こうと思っていた場所があるんだ」

「……まあ、今は家に誰もいないし、いいけど」

私は少し考えてから頷いた。

「それはよかった。じゃあ、なるべく人間でも通れそうな道を選んで行くよ」

猫は……シューナはそう言うのと、軽やかに塀から飛び降りて、私の目の前をゆらゆらと尻尾を揺らしながら歩き出した。

私も後を追いかける。

——こうして私は、不思議で奇妙で、でも決して夢じゃない、変わった一日を経験するこ
とになった。

「ほら、ついたよ」

十五分ぐらい歩いて、猫が立ち止まった場所は、空き地だった。

住宅街の中にあるような空き地ではなく、周りを木に囲まれている。

同じ町内なんだろうけど、私も知らなかった場所だ。

木のおかげで日光はそれほど入ってこない。でも、空気がこもってちよつと暑かった。(まあさつきまでに比べたら大分マシだけど)

「えーつと、ね、シューナ、ここどこ？」

心の中では猫、猫、と呼んでいたから、名前を呼ぶときも半分くらい言いかけちゃったけど、慌てて誤魔化す。

猫はくるりと振り向くと、にやあ、と一声鳴いて見せた。

「ここかい？ 私達は、ここを〈猫の家〉と呼んでいる」

「猫の家？」

「やはり人間は知らないようだね。〈猫の家〉にはたくさん猫が集まってくる。野良猫ばかりでなく、稀に飼い猫が来ることもあるね」

「集まってどうするの？ 猫の集会？」

「いや、私に悩み事を話したり、相談をしたりするんだ。私はほとんど聞き役だけど、悩み事を解決するのも仕事」

「どうしてあなたに話すの？」

私の疑問に、猫は答える。

「この〈猫の家〉の管理人が私だからだよ。〈猫の家〉には必ず人間でいう『管理人』がいる。

管理人は悩み事の解決をしたり、相談に乗ったりする義務があるんだ。そのほかにも、〈猫の家〉に関する出来事の最終的な決定権がある。〈猫の家〉で集会をすることもあるけど、その

場合は必ず管理人に許可を取らないといけない」

「ふーん」

そんな制度があるんだ。

「まあ、人間には馴染みがないだろうね。ところで、というか、そこで、君に頼みたいことがある」

猫はぱたんとしっぽで地面を叩いた。

「この〈猫の家〉に持ち込まれる相談事の解決を手伝ってほしい」

「……はあ？」

私は思わず聞き返した。

「でも、〈猫の家〉って猫が来るんでしょ？　あなただって猫だし、私みたいな人間が手伝ったりしていいの？」

「もちろん普通なら許可されないとところだが、管理人の私が許すから問題ない。それに、猫の本当の生活や姿を人間に知らせるために、テレパシーが通じる人間はここに連れてくる決まりだ」

「……でも、私、あんまり人と話せないよ。悩み事の解決なんて絶対無理」

「人と話す云々の前に、君は猫語が分からないだろう。私が話して後で君に通訳するから、君が話す必要はないよ。ただ考えて、実際に行動に移してくれればいい」

「……そんなあ。いきなり言われても……」

「大抵はそう思うだろうけどね、まずは一度やってみてくれないかい？ 最低でも一度は必ず仕事を手伝ってもらわないと。大丈夫、初回は私がほとんどやって見せるから」

「……まあ、どうせ暇だし、一回くらいだったら」

しばらく考えてから渋々私が頷くと、猫は得意げな顔になった。

「よし、決まりだ。じゃあ早速始めようか」

それから猫は、大きな声で勢いよく鳴いた。

するとそれに答えるように、あるいはその鳴き声を待っていたように木の影から遠慮がちに二匹の猫が顔を出した。

一匹は黒、一匹は茶色。

黒猫の方が前に出てきて猫に向かって鳴くと、猫はもっともらしく頷いてニャアニャア鳴き始めた。

まるで訳が分からず置いてけぼりを喰らっている私のことには気づかないようで、頷いた

りしっぽを揺らしたり、首を傾げたり片足を挙げてみせたりしながら、三匹はずっと話し合っている。

やがて猫が「ニャゴ、ニャアン？」と鳴くと、二匹はほっとしたように顔を見合わせて声をそろえて鳴いた。

それで話はまとまったらしく、猫がこちらを振り向いてテレパシーで通訳してくれた。

「こちらは黒猫の次郎と、茶色の方が春海はるみだ。うちの常連さんだよ」

「ふーん。双子なの？」

「いや、人間で言う幼馴染かな。今日は家を探しに来たらしい」

「家って……〈猫の家〉は不動産屋も兼ねてるの？」

「新しい家が見つからないというのも、立派なお悩みだからね。出来る限りは力にならないと」

猫はかなり真剣に考えこんでいる様子だ。

「もっと詳しく教えてくれないの？」

「知りたいのかい？」

猫の声が意外そうになったけど、すぐ冷静になった。

「二匹とも野良だから、適当な場所を見つけて野宿生活なんだよ。この間までは公園に住んでいた。大きな木があるだろう？」

「あ、糸川公園？ クラスの子が木の根元でよく野良猫を見かけるって話してた」

「そういう名前なんだね。で、次郎によると、そこに古株の野良が来たんだそう。次郎たちが生まれたあたりでは、古株の猫に場所を譲るのが常識だからね。ところが、公園はあちこちを周っていた次郎たちがやつと見つけたスポットだから、もうこれ以上他にいい家が見つからない。で、どこか丁度いい場所はないかって相談に来たんだよ」

「ふーん、そういう相談もあるんだ。それで、シューナはどこ知ってるの？」

「次郎たちはよく家の相談に来ていて、その度紹介してるんだけど……他にも家を探してる野良猫は多いし、その猫たちにいい物件はほとんど紹介してしまったから、そろそろ品切れかな……」

そう言われ、私も猫が住みやすそうな場所を考えた。

「土管の中……とか、アニメでよく見るけど」

「この町の土管もドラム缶も、私は全て把握してるよ。更に、全て他の猫に紹介した後だ」
……そうですか。

「空き地はないの？」

「あの辺は野良猫だけじゃなく野良犬も住みつくし、大体空き地みたいな人気スポットはほとんど早い者勝ちの大戦争だからね」

「……じゃあ」

私はいいことを思い付いた。

「ここはどう？」

「(H) (H)？」

「(猫の家)。ここなら、シューナが管理人だから誰かに盗られる心配もないんじゃない？」

「なるほど、と言いたいところだが、無理だね」

猫は一瞬だけ希望を持たせた後で、バツサリと切り捨てる。

「(猫の家)はいわば仕事場。家じゃないんだよ。それに、管理人以外が相談に来る以外の目的で長居するのも禁止されている」

「……それ厳しいんじゃないの？」

「厳しいかどうかは知らないが、とにかく無理だ」

完全に行く先を塞がれ、私は頭をひねる。猫が住みそうな場所、猫が住みそうな場所……。

あれっ。

これって、わざわざ場所を考えなくても……。

「ねえシューナ、次郎たちの地域では新参は古株に場所を譲る決まりなんでしょ。だったら次郎たちと同じ地域出身で、次郎たちより新しく来た猫の家に行けばいいんじゃないの？」

これは目から鱗だったのか、シューナはしばし考えこんだ。

「確かにそれはそうだな。でもそうすると今度はその猫の居場所がなくなり、また私に相談が来る。その繰り返しだ。やがて一番新しい猫が回ってきたら、もう策がないから場所を紹介するしかない。その時の為にも、一応場所は考えておきたい」

「それはそれで、その時考えればいいことじゃない。もしかしたら一番新しい猫が回ってくる前に、自分で新しい場所を見つける猫がいるかもしれないし。新しい猫が来ても、その時には別の場所が空いてるかもしれないし。とりあえず今はそれで場所を選んじゃえばいいでしょ」

「……ふむ、一理ある」

猫のくせに難しい言葉を使った後で、シューナは次郎と春海に向き直ると、おもむろに猫語で話し出した。

私たちの会話を丸ごと通訳しているのか話し終わるまでに時間がかかったけど、ようやく次郎と春海が顔を見合わせ、口々に返事をする、シューナはすぐに振り向いた。

「次郎さんたちもそれでいいそう。お手柄だな澄川、これで問題は解決だ」

その後ろから顔を覗かせ、春海が小さな声で鳴く。

「春海さんもありがとう、と言っている」

そう通訳してから、シューナは二匹の方を向いた。

「悩みが無事解決できてよかった。またいつでもどうぞ」

そう言っただけで次郎と春海を見送る猫を見ながら、私は思わず聞いていた。

「ねえ、シューナってどうしていつも魚屋からお魚盗むの？」

猫は不思議そうな声のテレパシーを送ってきた。

「どうして急にそんなことを聞くんだい？」

「だって、魚を盗むから、汚いとか悪いとか思ってたけど、今のシューナ見てたら全然そんな風に思えないから。何か理由があるんじゃないかなって思ってた」

猫は黙って考えていて、それから質問には答えず、これだけを言った。

「前まではたくさん猫を追いかけていて足腰も強い上に足が速かった魚屋のご主人だけど、

最近は走るまでもなく捕まるような猫ばかりで、盗む猫もそもそも少なくなったから随分衰えたらしいね」

私はその言葉に驚いて、猫の顔を凝視した。

今まで考えもしなかったことだった。

「さて、次のお客さんはどなたかな」

猫がちらりと見たほうを見て、私は「あ」と声を洩らした。

知っている猫だった。

クラスは違うけど家が近くて幼馴染の歩実が飼っているブチ猫のリリーだ。

歩実のリリーが大好きで、いつも面倒を見ている。

私も前に散歩中、遊んでいる歩実とリリーを見かけた。

歩実の家に行った時も、リリーは歩実によくついていてみたいだった。

そのリリーに、何があったんだろう。

リリーは私を見ると、一声だけ鳴いた。

でもその一言はちゃんと文章になっていたらしく、猫が興味深そうな顔をして私を見る。

「澄川の知り合いなのかい？」

「え、うん、知り合いって言うか、見たことがあるだけだよ。私の友達の飼い猫なの」

「そうか」

猫はリリーに向かって猫語で話しかけた。

話したのは猫語でも、考えていることがテレパシーで伝わってくるから、私にも何を言っているのか分かった。

「リリーさん、驚くことはありません。澄川はテレパシーが分かるようなので連れてきたんですよ。あまりお気になさらず。ところで、今日はどのようなご用件ですか？」

猫の質問に対し、シューナはいかにも残念そうな声を出した。

猫はふむふむと相槌を打っている。

そして、私に振り向いた。

「どうもリリーさんの飼い主が、最近構ってくれないらしい」

「え、歩実が？」

「部屋に籠っていることが最近多いから心配になって部屋まで行ったら、慌てたような顔で追い出されたらしい。その後も、学校から帰った途端部屋に入り込んで、このところまとも

に遊んでもらえないそうだ」

「ええ……？　でも、歩実はリリーが大好きなのよ。勘違いじゃないの？」

「勘違いかどうか、猫ではない人間なら確かめられるだろうね」

猫はにっこりと私を見てきた。

「……もしかして、私に歩実のところまで確かめに行けっというの？」

「猫の私じゃ、確認が出来ないだろう」

「そんなの、しばらくすれば絶対遊んでくれるわよ！　わざわざ家に行ってまで確認する必要があるの？　大体、歩実が家にいるかもわからないし、口実だってないじゃない。歩実が学校から帰ると部屋に籠ってるのは、リリーや家族以外誰も知らないわけだし、私が『最近リリーと遊んでないの？』なんて聞くのはどう考えても不自然よ」

「そんなの、『ブラブラ散歩したら寂しそうに歩いてるリリーを見かけて不思議に思った』とか、なんとも理由はつくじやないか。お客が〈猫の家〉に来て私に相談を持ち掛けてきた以上は、解決するのが私の役目だしね。今日は丁度澄川がいるから引き受けてもらうだけの話だよ」

「……上手く聞き出せなかったら、どうするの？」

「さあ？ 無理にでも話を切り上げればいいさ。友達なんだからちよつとのことであち行くなんて当たり前だろうし。それに澄川は、自分が想っている以上に人と話すのが上手いはずだよ」

「……そうかなあ」

不信ではあったけど、私は仕方なく承諾することにして、〈猫の家〉を出た。

「歩実、いる？」

……何とかいつも通りに言えた。

「歩実の家にやってきた私は、緊張しながらもいつも家に遊びに来た時の決まり文句を口にしていた。」

「いるよー」

幸運なことに、歩実は外出していなかったらしい。

すぐに顔を出してくれた。

「どうしたの、急に」

「えっと……聞きたいことが、あつて……」

ダメだ、いざ顔を合わせるとやっぱりつかえる。

私はおどおどと、用件を切り出した。

「あの、最近、リリーと仲悪かったりするの……？」

「リリーと？」

心当たりがあるのか、歩実ハッとした顔になった。

「どうして？」

「え、っと」

私は咄嗟に、猫から教えられた言い訳を口にした。

「暇だから、さっきブラブラ歩いてただけだよ……リリーがトボトボ歩いてるのを見かけて、元気がなさそうだったし、元気がなさそうなのに側に歩実がいなくても気になったし、最近仲、悪いのかなって思って聞きに来たの」

「そっか、じゃあもしかして怒ってるのかな」

歩実は気まずそうに笑った。

「やっぱり何かあったの？」

「もうすぐリリーの誕生日なのは、知ってる？」

「あっ」

そう言えばそうだった。

毎年このくらいの時期になると、歩実は急にテンション上がる。

「だからね、リリーに新しい寝床、作ってあげようと思って。今の寝床はもうボロボロだから。内緒で作ってるんだけど、リリーいつも側に来るから、急いで別のところに追い出しちゃうの。作り終わったら適当な場所に隠してまた遊ぶつもりだったんだけど、猫じやらしがいつぱいある場所を発見して、猫じやらしでモビールみたいなを作ったら面白いんじゃないかなーって思って作り始めたら、もう止まらなくて」

説明を聞いたら、思ったほど深刻でも仲が悪いわけでもなくて、私は安心した。

「そっか、すごく単純なことだったんだ」

「うん。リリーが寂しそうにしていただけなのに、わざわざ来てくれたの？ ……あ」

すぐに気づいたらしい。

歩実の顔がくしゃっと歪んだ。

「……ごめんね。心配してくれたんだね」

その言葉を聞いて、こっちこそ何だか申し訳なかった。

私は猫に言われたから、渋々仕事で来ただけ。

確かにリリーは寂しそうだったけど、心配は……正直言って、あんまりしてなかった。

でも、歩実の言葉に昔の事を思い出して、私の胸はきゅっと痛んだ。

「……うん。ありがとう、教えてくれて。急に押しかけちゃってごめんね。あと、プレゼントはきつと喜んでもらえると思うけど、でも、今のうちにいっぱい遊んであげるのも大事だと思う。……多分余計なお世話だけど」

私はそう言って笑うと、すぐに〈猫の家〉に向かった。

歩実は、きつと勘違いしたんだろう。

私が猫に辛い思い出があることを知っているから、それで心配したんだって。

〈猫の家〉に走りながら、私はそう思った。

あの時私が猫の名前を自由に決めていいと言われた時、真っ先に『シューナ』と口にしたのは、猫という種類がシューナを思い起こさせたからだ。

シューナは私の飼い猫だったけど、私とは何をするにも一緒に、同じ部屋で同じタイミングで食事をし、散歩するシューナに私はついていき、散歩する私はシューナを連れて行った。

思い出はたくさんある。とてもこの数秒間では全てを思い出せない。

飼ったばかりのころは私も猫の事を全然知らなかったから、お母さんやスマホに教えてもらいながら、飼育用の本を片手にシューナの世話をした。

シューナにミルクを上げるとすごく喜んでくれて。

学校が終わると、下駄箱の上に座って『ニャア』と鳴いてくれた。

噛まれたり引つかかれたり、たくさんした。

痛かったし怖かったけど、だんだん仲良くなってくると、『シューナになら噛まれてもいいか。』と覚えてきたのは不思議だった。

シューナと一緒にあって『明るくなった。』と周りから言われるようになって。

それはまるで飼い主と飼い猫というより、家族のような存在だった。

……過去形にしたことから、もしかしたら分かるかもしれない。

シューナは三か月前になくなったのだ。

交通事故に遭って、この世から。

シューナが事故に遭った時、私はそばにいなかった。

いてあげられなかった。

だから私はよく思う。

時間を戻すことは出来ないと分かっているけれど、でも、もしそれが叶う事なら、シユーナの隣にいてあげたかった、と。

そうしたら、シユーナが事故に遭うのを防げたかもしれない。

防げなかったら、『すぐ近くにいたのに、どうして。』と思うかもしれないけど、直前まで一緒にいてあげられたと考えれば救いになるかもしれない。

——あの時私が、そばにいてあげられていたら。

謝りたい。

言葉が通じなくてもいいから、ただ一言だけ、シユーナに言いたい。

ごめんなさい、と謝りたい。

あれだけ長い間に一緒にいたのに、最後の最後でシユーナの隣にいてあげられなかった、一緒にいてあげられなかった私は、なんてひどい飼い主だったんだろう。

言葉が通じていれば、シユーナが私をどう思っていたのか分かったのかもしれない。

もしかしたら許してくれていないかもしれないし、元からご飯や寝床が好きだったただけで、私と一緒にいる事には価値を感じていなかったかもしれない。

シューナの存在が私を変えてくれたように、シューナの死が私を変えた。

どれだけ仲良くしていても別れは来ることを、まだ身近に死を経験していなかった私に教えて、シューナは消えてしまった。

その時私は、自分は普通だったんじゃないかと初めて思った。

朝テレビをつけてニュースをボンヤリ眺めるのが家の習慣になっている。

そうすると、悪いニュースも少なからず耳にする。

でも私は何とも思わなかった。

人が殺された、とか、子供が虐待されていた、とか思うと、心が痛むし可哀そうとは思わんだけど。

でも、『悲しい』とはどうしても思えなかった。

辛いと思っても、すぐに忘れてしまう。

家で『あんなニュースがあったね、ひどかったね。』と話題になり、ああそうだったと思いつくくらいで。

全然話したこともなくて、ニュースを見る間で名前も顔も知らなかった人が『死んだ』と急に言われても、悲しいなんて全然思えなくて、実感もなくて。

だから私は冷たいのかな、とずっと思っていた。

人が死んでしまっているのにちよつと辛いだけで何とも思わず、あつさりと忘れてしまう自分は、冷酷なんじゃないかと時々思った。

でも、シューナが死んだとき、私は空っぽになって、それで思った。

自分はもしかしたら冷たくなりたいのかもしれない、と。

今まで私は人が死んでも悲しめない人間だと思っていたけど、シューナの時は違った。

一瞬で頭が、心が全部真っ白になって、全部抜け落ちて、唐突過ぎて実感も何もなくて泣いたりもできなくて、でも、シューナのいない家に戻ってきて、シューナの寢床を片付けていると、急に実感が湧いてきて、すごく悲しくなった。

大切な誰かがいなくなることは、想像よりもずっと悲しいのだと、私は知った。

「やっとなたね」

戻ってきた私にそういう猫に向かって、私は言った。

「あの、リリーに伝えて。もうしばらく歩実はあんな感じかもしれないけど、リリーの事が嫌いになったわけじゃないから、安心してって。これ以上は、ちよつとあんまり言えないん

だけど……でも、歩実はリリーの事、凄く大好きだから」

私の言葉に、猫は軽く目を見開いたけど、何も言わずに頷くとリリーに向き直った。

歩実のプレゼントの件も無事終わり、私達は〈猫の家〉で次のお客を待っていた。

すでに夕方になり、太陽の位置は低い。

猫もほとんどいなくなっているかと思ったら、一匹の猫が寂しそうな顔をして残っていた。

ふわふわの白い毛並みに、目は緑色。

お洒落な感じの猫だ。

首輪はしてないけど、綺麗だから飼い猫なのかな。

「おや、マーカさん。今日のご相談は何でしょう」

猫のセリフを聞くと、どうやらこの猫（マーカって名前なのね）は常連さんらしい。

そのマーカは、猫を見つけたとたん表情を一変させて走り寄ってきた。

「ミャアアア！ ニャゴオ！ ミャン！」

「随分慌てていらっしやるようですね。今度は子育てのご相談ではないのですか？」

「子育てって？」

私が猫に小声で訊いても、猫は無視してマーカの訴えを聞いている。

その顔がたちまち引き締まった。

「成程、それはご配慮でしょう。分かりました、すぐにでも始めます」

「ミヤウ」

どうやら話がまとまったようなので、私は猫に聞いた。

「何て言ってたの？」

「マーカさんはこの間子猫を二匹産んでね、ちょっとしたお祭り騒ぎだったんだ。でもどうやら、その子猫が二匹とも迷子になったらしい。必ずこの町にはいるはずだから、探してほしいということだった。勿論マーカさん自身も私達と一緒に探す」

「子猫探しかあ……でももう夕方ですよ。そろそろ家に帰らないと」

「今家に帰ったら、明日にはもう隣町にいるかもしれないんだよ。怪我をして動けないまま夜を明かしているってことだって考えられる。早いうちに探しにかかったほうがいい」

「……まあ、それもそうね」

「手分けして探した方が効率がいい。人間と話せる澄川は、住宅街や商店街なんかの人通りの多いところで聞き込みをしてくれ。マーカさんは人間と話せないから、猫相手の聞き込み

の方がいいだろう」

「ミヤオウ、ミヤンミヤン、ニヤア」

「そうでしたか。では、チップにその話をしてもらえますか」

どうやら意図を察したらしく、マーカは頷いた。

「話した後は、人の多いところは澄川が担当しますから、それ以外の場所を探してください。私はこの力でお互いの言葉が分かりますし、二人の窓口として動きつつお子さんを探しましょう」

マーカは一つ頷いたかと思うと、もう次の瞬間には身をひるがえして走り出していた。

「澄川、話は聞いていただろう。マーカさんはここに来る途中ですでに何匹かの猫に聞き込みをしていたそうだから、お子さん探しに集中してもらおうことになった。チップという猫が話を広めるのが早いから、その猫に話してもらえれば目撃情報はわりとすぐ集まるはずだ。そうすればマーカさんは聞き込みをする手間と時間が省ける。君も急いで探してくれ」

「分かった」

迅速な判断に感心しながら、私は急いで走り出した。

私はまず、〈猫の家〉から近い商店街に向かった。

「あっ」

見つけたのは今朝会った魚屋のおじさんだ。

駆け寄ろうとして、足が止まる。

朝そっけない態度を取っちゃったし、怒ってたらどうしよう。

なんだか気まずい。

それに例の人見知りはまだ直っていない。

もし変なことを言っちゃったら。

「おお、まだ家に帰ってなかったのかい？　もう暗くなってきたし、早く帰った方がいいぞ」
迷っていると、おじさんの方から声を掛けられた。

「えっ……ああ……」

急なことで、なんと返していいか分からない。

どうしよう、何を言おう。

気分を悪くされちゃったら困るし、「今から帰るところなので大丈夫です」くらいがいいかも。

でも本当はこれから町中歩き回るんだし、見つかったらそれはそれで気まずい気がする。
第一嘘をつくのは辛い。

どうしよう、沈黙が続いちちゃってる。

やっぱり無難に会釈で？

そうだ、でも子猫の事を聞かないと。なんて言おう。

「今日はトラックが来るみたいだから、帰るなら事故に気を付けてな」

更におじさんに言葉を続けられた私は、

「——あのっ」

反射的に、言葉を口に出していた。

「ね、猫、見ませんでしたか？ 子供の猫で、はぐれちゃって、探していて」

「子猫？」

しまった。

何も考えないで聞いちちゃった。

どうしよう、紙に書いてあったら確認できるけど、言葉は確認できないし削除も訂正もできない。

今、日本語おかしくなつてなかつたかな？

言葉の羅列大丈夫？

そもそも何て聞いたんだっけ、えーっと。

「いや、見てねえな。大人ならトラ猫を一匹見たが」

様子を見ていたらしい女の人が聞いてきた。

「子猫探してるの？」

「あつ、えと、その、ん、はい」

「だったら見たわよ、あたし。黒猫なんだけど、その子かしら」

「……えっ？ あ、その、ごめんささい、私はちよつと……」

うわあ、やっちゃった！

だよね、おかしいよね、探してる人が何も知らないなんて。

それにせつかく情報提供してくれる人がいたのにお礼も言わないでモゴモゴ話しちゃったし……。

「黒は違う」

「えっ？」

頭の中に聞こえてきた声に、私は周囲を見回した。

今の、多分テレパシーだよな。

遠くからこの会話を聞いて、遠くからテレパシー送ったとは考えられないし……近くにいるのかも。それともそれができるのかな？ 話してなかっただけで。

「？ どうしたの？」

怪訝そうな女の人の声が聞こえてくる。

しまったっ。

今のはテレパシーだけど……普通の人には聞こえないんだった。

話してる途中で急に相手が変わる声出して、目をそらしたりしたらきつと誰でもいい気持ちしないよね。

どうしよ……謝った方がいいよね。

なんて謝るの？

ごめんなさい？ すみません？ こういう時ってお辞儀するんだっけ？ でも目は合わせ方がいいよね？

「色は白だ。白猫を探すといい」

ぐるぐると考えを巡らせる私の頭の中に、流れ込んでくるテレパシー。

「目も緑だから、マーカが小さくなったと思って探してみてくれ」

そこまでテレパシーが送られたところで、

「あーっ、ドラ！」

おじさんが指さして叫んだ。

反射的に、私も女の人もそちらを見る。

魚屋のおじさんに追われて、風のように走り出した猫が目映った。

「それから忘れていたようにだが、猫は二匹いるから一匹見つかっても油断しないでもらいたい！ 逆に二匹一緒に行動していることもあり得るからその線で探してくれ！」

そう言い残して、猫はあつという間に家の屋根に駆け上り、大声で怒鳴る魚屋のおじさんを尻目に颯爽と逃げていった。

「……えーつと。それで、あたしが見た猫は違うのかしら」

悔しがらるおじさんを見ながら、女の人が再度聞く。

「あつ、え、あの、ち、違うと思います……あの、ごめんなさい」

「違うの？ そうかと思っただけ……ごめんね。じゃあ、私が知ってるのはそれだけだ

から、子猫探し頑張ってる」

つかえながら最近あまり人と話していない私が口にした言葉に気を悪くした様子もなく、女の人はあっさりとそう言っただけで歩いて行った。

「ねえお姉ちゃん、どんな猫？」

私達のやり取りを見ていたのか、お母さんらしい人と手を繋いだ小さな男の子が無邪気に聞いてくる。

「あー……えっと、白猫で、目は緑色で、小さくて、あと、えっと、二匹いるの」
下手くそな私の説明を、男の子は理解してくれたようだ。

「緑色の目の、二匹いる白猫ちゃん？ 僕は見てないけど、ママは見たんじゃない？」

男の子に突然振られたお母さんは一瞬驚いた顔をしていたけど、すぐに答えてくれた。

「見てないわ、ごめんなさい」

「い、いえ、全然大丈夫です……」

縮こまっていると、助け船が入った。

「あら、白猫なら私、さつき住宅街の方で見たわよ。目の色は分からなかったけど、二匹揃って仲良さそうに歩いてたわ。綺麗な子なのに首輪してなかったから、野良なのかしら？」

て思ってた気になってたの」

「本当ですかっ？」

声のした方を見ると、顔も見たことのない四十代くらいの女の人だった。

「もしかして、あなたが探してる猫かしら」

「た、多分……。ありがとうございました」

今度はスラツと言葉が出てきた。

私は頭を下げると、急いで住宅街に向かう。

住宅街。

距離の近い商店街から先に探そうと思っていたけど、どうやら間違ったみたいだ。

でも、さつき見たのなら、今でも無事な可能性が高い。

少なくともさつきまでは怪我もせず歩いていたのだ。

しかも二匹揃って。

安堵の息を洩らしながら、私は住宅街の方角に向かってペースを速めた。

そこで、住宅街と言っても範囲の広いことに気づく。

「住宅街のどこにいたのかな……。聞き忘れた……」

そう言いながらやっと住宅街にたどり着くと、太陽はさらに低い位置まで落ち、三分の一程がアパートや家の屋根に隠れてしまっていた。

もう時間も経っているし、子猫は別のところに行ってしまったかもしれない。

「テレパシーかあ……二人にも来てもらって、手分けして探したいけど……今は猫、近くにいないみたいだし」

本当は『二匹』と表現しなければならぬだろうけど、そのうち一匹とはずっと人の言葉で話していたからかっつい人間感覚になってしまう。

「……とりあえず、探そ」

ポソツと呟き、駆け足になる。

道端、路地裏、赤い光に覆われ始めた道路を歩く人と人の間。

走りながら、あちらこちらに目を走らせる。

流石に子猫が屋根に上ることはないと思うけど、猫と言えば屋根のイメージが無意識のうちに根付いていて、視線は上のほうにも迷い込んでしまう。

「もう……見つかるのかな……やっぱり別のところに行ったんじゃ……」

そろそろ体力も尽きかけてきたので、歩きに切り替えながら私はぼやく。

息が上がりに、顔が熱かった。

「……あそこで曲がった方が良かったのかも」

同じ町とはいえ、この住宅街は通りがかったことが何回かあるだけだ。

家とも学校ともまるつきり方向が違うので、まともに歩いたことはない。

だから、迷わないように一度も曲がらず真っすぐに歩いてきた。

真っすぐに歩くことのできないT字路は右に曲がり、左にはいかない。

そうすればきつと迷わず帰ることができるだろう。

でも分かれ道で一方向にしか行かないということは、それだけ探していない場所が多いということだ。

あそこで違う方に曲がっていたらとか、真っすぐ行かずに曲がっていればとか、考えればきりがない。

「この辺で終わりかな……」

一度引き返してまだ探していない道に行こうと、私は回れ右をする。

そして、まず一番近い曲がり道を曲がった。

「……あっ」

見つけた。

真つ白でふわふわとした毛の子猫が道路に二匹よりそっている。

一匹がこちらを向いた。

パツチリとした緑色の瞳が私を捉える。

マーカに報告した方がいいかも、と思った後で、報告している間にいなくなるかもしれないから捕まえるのが先だと思い直す。

「……よし」

ひっかかれたり噛みつかれるかもしれないけど、相手は子猫だ。

多分うまくいく。

そう思い顔を上げた私の目には、子猫に迫るトラックが映りこんでいた。

「……え」

子猫の位置は道端に近い道路の端で、丁度迫ってくるトラックのタイヤの真正面だ。

——今日はトラックが来るみたいだから、帰るなら事故に気を付けてな。

あの時言われた言葉を思い出す。

同時にもう一つ、シューナの事も頭をよぎった。

迫るトラック、鳴き叫ぶ猫。

一時停止したかのような人達……見ていないはずなのに、近くにいてあげられなかったはずなのに、トラックに轢かれるシューナと轢かれそうになっている子猫が一瞬で重なる。

頭の中を流れていく、たくさんの「私」。

シューナが好きだった毛布を抱きしめて、涙が枯れるんじゃないかと思うくらい泣いた。床に落ちた、まだ掃除していない生きていたころのシューナの毛を見ると、また泣いた。仲が良かったから、家族だったからこんなに悲しい。

もしシューナを飼っていなければこんなに悲しくはならなかったはずだ。

シューナを飼わなければよかったと思っているわけじゃない。シューナがいた時間はすぐ楽しくかった。

でも、シューナの死で、私にはある考えが根付いた。

仲良くしていても、別れる時は絶対に来る。避けては通れない。そして、仲良くすればするほど別れの時は辛い。同じ別れるなら、悲しみが軽い方がいい。

私だけじゃない、相手だつてきつと辛いはずだから。だから、もう誰とも仲良くならない

ほうがいい。

人と関わらないようにしようと決めた私の姿を、まるで他人になったように私は見つめる。そして。あの時も今も、心の中に反響する想い。ペットに限らず、大切な相手がいなくなってしまうたら、例え他人の心には残らなかつたとしても、家族や友人はとても悲しい。

悲しい。

悲しいとしか言いようがないくらい、言葉にできないくらい、とても悲しい……。

そこで私は、ハッと我に返った。

シューナの事を考えていた脳が、子猫とトラックを鮮明に私の瞳に映し出す。

「……ダメ」

シューナが死んだとき、私は悲しいと思った。

この子猫がトラックに轢かれてしまったら、マーカだつて悲しいだろう。

他の猫も悲しむかもしれない。

まして、こんなに小さな子達なら、まだまだ生きられるはずなのだ。

「だめっ！」

びっくりするくらい大声が出た。

ここ数か月、ずっと出してはいないくらいの声。

そのまま私は、後先考えず子猫に向かって駆けだした。

しゃがみこんで子猫を抱えるのか、突き飛ばすのか、それともただ手を伸ばしたかっただけなのか、自分でもよく分からないままに。

トラックに近づくと、見えなかった窓の向こうの運転手さんの顔が驚愕の色に染まっていた。

子猫に気づいたのか、私に驚いたのか。

それは分からないけど、私の耳にははっきりと、『キーンッ!』という、トラックのブレーキが踏まれる音が聞こえていた。

でも、多分間に合わない。

「だめ……っ」

死なせちゃいけない。

ここで死なせたら、シューナの時と同じだ。

そんなの絶対にだめ。

「だけど、これじゃ本当に間に合わ……」

「後ろだ！」

私の脳内に響いた声は、テレパシーなのに空気を切り裂いたんじゃないかって思うくらい、大きくて必死だった。

「シューナ！」

今まで、他の猫とシューナを一緒にしたくない、他の猫にシューナと同じ名前をつけたくないという気持ちがあつたからか、呼ぶことに抵抗のあつた名前が激しい叫び声になって私の唇を震わせる。

同時に、真っ白な閃光が走りぬけた。

「ミャーゴォ！」

猫の鳴き声に、終わった、と一瞬思った。

けど揺れる目には、停止したトラックとタイヤすれすれのところでうずくまるマーカの姿がはっきりと映っていた。

「こらーっ！ あ、危ないだろう！」

運転手さんが駆け下りてくるのも、気にならなくて。

私は真つすぐにマーカの元へ向かった。
屋根から縞模様の猫が飛び降りてくる。
シューナだ。

「マ、マーカ、二人とも……無事？」

ふらふらと近寄る私の視線を辿り、運転手さんもようやくマーカたちに気づいたようだ。
怒りで紅潮していた顔が、一瞬で気まずそうになった。

「安心しなさい、マーカも子猫も無事だ」

テレパシーで嬉しい報告をしてくれるシューナ。

恐る恐るのぞき込むと、マーカの真つ白なお腹に体を摺り寄せて、二匹の子猫が震えていた。

かなり怯えているようだけど、怪我は見当たらない。

あの時間こえたシューナの声と、きつとマーカだったんだろう、あの白い閃光を合わせる
と、多分マーカが子猫二匹をくわえて引き寄せるか何かして道端のほうに移動させたんだろ
う。

「よ、よかったあ……生きてるんだ……」

ほおっと一気に気が抜けて、今にも嬉し泣きしそうだったけど、涙を流す力すら残って
なかった。

汚いのも気にせず足の力が抜けるがままに道路にへたり込む私に、運転手さんが上から声
をかける。

「あー、すまなかつたな。嬢ちゃんの飼い猫かい」

「……違います、でも」

私は返事に迷った。

飼い猫ではない。

それは確かだ。

今日の夕方会ったばかりで、仲がいいわけでもなかった。

でも、自分でも分からない。

それなら——飼い猫ではないのに、仲がいいわけでもないのに。

どうして私は、マーカたちを助けようとしたんだろう。

死んでほしくなかったからだろうか。

でも、会って間もない動物や見知らぬ人が死んでしまっても、私は悲しくもなくて、何と

も思わなかったはずなのに。

なら、どうしてだろう。

「……でも、この猫ちゃん達が轆かかれたら、凄く悲しむ人がいるって思ったから……放つておけなくなっちゃったんです」

考えを巡らせていれば、知らず知らずのうちに言葉は出ていた。

そうだ。

この二匹が死んでしまったら、きっとマーカの悲しみは計り知れない。

その他にも沢山の人や猫が沢山悲しむと思ったから、だからその顔を見たくなくて。

私と同じ顔を、させたくなくて。

「……そうか、悪かったね。次からは人だけじゃなく、猫や犬にもちゃんと気を付けるよ」
運転手さんは胡麻塩頭をポリポリとかいた。

よく見たら、日焼けしていて歯が白い、人の好きそうなおじさんだった。

「はい、ありがとうございます」

私は頭を下げた。

「じゃあ、気を付けてな！　こんな可愛い子猫を轆かずにすんで助かったよ、ありがとう。」

俺の時は助かったからって油断して轢かれるなよ」

そう言つて歯を見せて笑うと、運転手さんはトラックに乗り込み、私達がタイヤから離れたのを確認してから発進させた。

どんどん遠くなつていくトラックを眺めている私に、シューナがテレパシーを送ってくる。

「人とちゃんと話せてたじゃないか」

「え？」

私は振り向いてから、さつき運転手さんとスラスラ話せていたことに気づいて驚いた。

人見知りでなくても、パニックになりそうな場面だったのに……。

「あ……ホントだ。……ねえ、シューナ。さつきはありがとう」

「さつき？」

シューナは首を傾げた。

「さつき。子猫ちゃんが轢かれそうになつてた時。シューナが『後ろだ』って叫んで、マーカさんがちゃんと反応したから……。私は結局、後先考えないで走ってただけだったね」

私の言葉に、意外にもシューナは

「そんな事ないだろう」

と言い出した。

「それを言ったら私はただ叫んだだけだ、実際に子猫を助けたのは母親のマーカだよ。それに私が叫んだのもマーカが動いたのも、澄川のおかげだからね。感謝するよ」

「ミヤイン。ニヤーゴ」

「ほら。マーカさんも澄川のおかげだと言ってる。ありがとう、とも」

「え、ええ？ でも私、本当に何もしてないのに……」

「澄川。偶然私とマーカが現場に通るかかったなんてことがあると思うかい？」

「？」

「君が大声でだめだと叫んでいるのが聞こえてきてね。何かあったのかと住宅街に駆け付けたんだよ。丁度マーカさんと合流して情報交換している時だった。だから二匹揃って行ってみたら、トラックとマーカさんのお子さんを見つけたんだよ。君があの時叫ばずに無言で走ったり立ち尽くしていたら、私達は気づかなかった。君のおかげだ。それにもしあの時澄川がこの道じゃなく別の道にいたり、商店街にいたりすれば私達どころか誰も子猫には気づかなかったから、それもお手柄だ」

真っすぐに褒められ、私はなんだか照れ臭かった。

「あは……ありがと……」

「人見知りも克服できていたじゃないか」

「あれは……必死だったから……いつもだったら、多分あんなにはつきりとは返事できてないよ」

「そうかもしれないが、一度でも苦手なことをちゃんと出来た経験は貴重だよ。それではマーカさん」

テレパシーを一旦取りやめて、シューナはマーカに向かって猫語で何か話しかけた。

黙って聞いていたマーカは一声鳴くと、子猫を連れていなくなってしまった。

「今日はまだ暗いから、お帰り頂いた。そこで澄川、今日一日働いてもらった報酬とお手柄の褒美を兼ねて、いいものを見せてあげよう」

「いいもの？」

「ついておいで」

シューナはくるりと後ろを向いて走り出す。

それでも全力は出していないのだろう、いつもは魚屋のおじさんを圧倒しているシューナに、私でもその姿を見失うことなくついていくことが出来た。

「ここまで来れば、目的地は分かるんじゃないかい」

小走りに道を通り抜けながら、シューナが聞いてくる。

「……〈猫の家〉？」

「正解」

自信なく口にした答えに、シューナはそう答えた。

「ほら、着いたよ。真ん中まで行って」

「ここがいい場所？」

何をするつもりなのか分からないまま、私は〈猫の家〉の真ん中に立つ。

「ふんふん、いい位置だね。じゃあ、そのまま後ろを向いてごらん」

「後ろ……分かった」

クルリと振り向いた瞬間、私の目はただ一か所に釘付けになった。

「……うわぁ」

「その声と顔からすると、気にいったようだね」

シューナの言葉に、ただうなづく。

私が見上げたその先には、今にも落ちてきそうな丸い丸い満月が、夜の黒い空をバックに

ぼんやりと浮かび上がっていた。

「……すごい。こんな綺麗な月、初めて見た」

月がこんなに綺麗だつても、月がこんなに綺麗に見える場所があるつても知らなかった。

「これが、私達猫がいつも見ている夜だよ。……さて友里^{ゆり}。君に一つだけ教えておきたいことがある」

「何？ ……えっ？」

私が驚愕の声をあげたのは、教えたはずのない私の名前を、シューナが口にしたからだ。

「澄川友里。さっきトラックの件で思い出したよ。私を見てシューナと呼んだ時から、なんとなく考えてはいたけどね」

シューナは私の横を通り過ぎると、目の前に座って私と同じように満月を見上げた。

「人間の時間間隔で言う、三か月ほど前だったかな。悲しい事件だったよ。シューナと私は良い友達だった」

ぽつりぽつりと、シューナは語る。

私は初め、自分が言葉を出せないのは、シューナの話が突然なのと意外だったからだと思

った。

でも、自分で思っているほど動揺しても驚愕してもいないことに、私は気づいた。

「よく人間の事について話したものだよ。ただ不思議だ、昔の話なのに、懐かしいとは思わないね」

シューナが私の頭に、心に向けて放つ言葉を、私はただ記憶する。

「君はシューナが大好きだったんだろう、澄川。シューナが死んだときそばにいてやれなかったことを、悔やんでいたりはしないかい」

「……」

私の沈黙を、シューナは肯定と受け取ったようだ。

「人間と猫は言葉が通じないから、言いたいことを言っても伝わらない。たとえ言葉が通じたとしても、超能力でもない限り相手が本当の事を言っているかはわからない。だけど私はある日聞いたシューナの言葉を、これは間違いなく本心だと受け取った。シューナの話聞いた私は、シューナが飼われている家が逃げ出そうと思えば逃げ出せる家だったことに驚いた。警備、というほど大袈裟な物ではないかもしれないが、猫を飼っているとは思えないくらいザルだね」

「……」

今度の沈黙は肯定ではなくイラッと来たことを表していると、シューナは分かるだろうか。そりゃ、猫を飼うのは初めてだったし、どんな風にすればいいのか何にも分からなかったんだだけ。

開放的過ぎたのかな？

「そこでシューナにどうして逃げ出さないか聞いたところ言われた言葉が、さっきの本心だと確信したセリフだ。シューナは言った。まず餌が美味しい、寝床が柔らかくて気持ちいい。そして」

私も想像していた答えを挙げたあとで、シューナはこちらを振り向いた。

その表情はさっきまでと違う。

猫の表情は私には分からないけど、なんとなく、これは笑ってるんだなって思った。

「……飼い主がとても優しく、一緒にいると幸せな気分になれるからだそう。その飼主のことを、シューナは友里、と呼んでいた」

友里。

私の心の奥に、その名前がずしんと響く。

そうだったの？ シューナ。

私の事、好きでいてくれたの？

「君に出会えたことに感謝していると、シューナは言っていたよ。怖がった自分が近づいてくる君をひつかいた時、君は怒りもせず泣きもせず、ただ優しい顔で笑っていたそう。シューナは、相手の一家がどう思っているかは分からないけれど、いい家族を見つけられて幸せだと話していた。本当に嬉しそうだったよ。だからきつとあの事故の事も、シューナは恨んでなんかいないだろう」

「……でも、いくら私と入れて幸せだって言っても、死んだときの気持ちなんて分かんないよ。もしかして、信賴してた分、一緒にいてあげられなかったことを裏切られたって思ってるかも」

「そうだね、人が死ぬときの気持ちなんて誰にも分からない。でも誰にも分からないってことは、自分で勝手に空想しても誰にも文句は言われなくていいことだよ。自分を恨んでいたんじゃないかと思うより、感謝してもらえたかどうか想像する方が、ずっと前向きな気持ちになれる」

シューナはまた満月を見上げた。

「それに澄川は自分が死ぬときシューナがそばにいらなくても、『隣にいて欲しかった、恨んでやる』とは思わないだろう？ きつとシューナもそれに似たようなものだったと思うよ」

「そっか……ありがとう、シューナ。でもやっぱり私は、勝手にシューナが幸せだったって思い込んだりは出来ないや。もし違ったら、つてどうしても考えそうになっちゃう。でも、いくら考えても結局は分からないから……これからは、シューナの気持ちはあんまり考えないようにするよ。でも一緒にいた時のことを忘れたりほしくない。思い出としてちゃんと取っておきながら、今いる家族や友人が死ぬときは絶対後悔しないように、ちゃんと接していきたい」

「それはいい事だね」

シューナは言った。

「人間に限らず、生き物はいつ死ぬかなんて誰にも分かりっこないんだから、まずは自分が気を付けることだよ。ただ、いつ死ぬか分からない以上は、死んでも何も後悔することがないなんてことはよっぽどの事がない限り、有り得ない。だからせめて、後悔しないとはいかないまでも、『生まれてくることが出来てよかった』と思えるようにしておくことだよ。シューナのようにね」

シューナがシューナの名前を口に出すことは、何だか不思議な感じがしたけど、でも全然変だとは思わなかったし、何故か違和感もなかった。

けど、違和感がないことが当たり前のような気もした。

「さてと。それじゃあ君とはここでお別れだね」

「お別れ？ シューナ、どこかに引越してもするの？」

「いいや。でも、テレパシーで話すことはもうない。人間に猫の本当の姿を知ってもらおうことは大切だが、それ以上に違う種族同士が必要以上に関わり合うと自然が狂っていくからね。君だって『超能力の欠片もち』ではない普通の人間だったなら、それか私が普通の猫だったなら、今日のような一日を体験することは本来なかったんだ。あるはずのない一日を、過ごすことのないはずだった一日を経験できただけでも幸せだね」

シューナはそう言うけど……私は、突然の事で、受け入れられなかった。

確かに猫と人間が話すなんて、自然界の常識を壊すことこのうえない。

でも、それでもこの後も、ずっと私達は話していけるって、いつの間にか心の中で信じていた。

「……だ、だけど。もうシューナは私に手伝ってもらわなくていいの？」

「前から私一匹でやっていたからね。君に手伝ってもらうのは一日限定。それに初めて来た時君は、やりたくなさそうにしていただろう？」

淡々とした答えに、私は頭がぐちゃぐちゃになった。

「それとこれとは話が別でしょ。……別ではないけど、でも、昼と夜じゃ違うんだから、考えだつて変わるの！ ねえ、本当に私達、もう話せないの？」

「ああ。自然の流れを極端に変えてはいけない。それは暗黙の了解であり、公然の認識でもある。人間と猫が話し、分かり合うという本来有り得ない時間を過ごすことを許してもらえただけでも幸運だ。ただ、私は嬉しく思っているよ。その有り得ない時間を過ごした相手が、澄川友里という人間だったことを。今日は本当にありがとう」

シューナは後ろを振り向かなかつたけれど、一軒冷たく見えるその態度だったけれど、でも、シューナの言葉は本当に心の奥の大事な部分に染みこんできて、それこそ染みみたいにゆっくりと広がっていった。

多分この温かい染みは、これから沢山の時間をかけて、多くの思い出を浴びて、もっと大きくなるんだろう。

そうなつてほしい、と私は願った。

「分かった。……もうシューナとは話せないことは。でも、シューナに会えなくなるわけじゃないんだよね？　もし町で見かけたら、話しかけてもいい？」

「そのくらいなら、猫好きが既にやっていることだし、自然の流れを変える事にはならないね。でも、返事はしてあげられないよ。無視されてもいいのかい？」

「シューナに声をかけられれば、何でもいい」

「私はきっぱりと言った。」

「それにシューナは、私を一日限りの使い捨てだと思ってないでしょ。手伝ったのがたった一日でも私の事を、仕事仲間とまではいかないまでも、ちゃんと認めてくれてるでしょ」

シューナは答ええない。身動き一つしない。

でも私は、シューナは今頷いたんじゃないかなって思った。

「それで、ちゃんとお礼を言ってくれたから、嬉しかったって言ってくれたから。だから私、今日の事忘れない。ずっと覚えてるって約束する」

「……約束だよ」

ふいにシューナがそうテレパシーを送り、駆け足で木の下へ向かった。

木の葉の間から漏れる月の光が、まだら模様になって黒い闇に包まれた地面にはらはらと

舞い落ちている。

その中へ飛び込んだシューナは、こちらを振り向いた。

その瞳は、今まで観たことがないような強い輝きを見せていた。

「さて。信じられないような時間だったと思うが、この一日をお楽しみいただけただけかな？」

まるで劇団の司会者（それとも団長なのかな？）みたいな口調で、シューナは言葉を紡ぎ始めた。

「最後までお付き合いありがとう。またのお越しをお待ちしているよ」

シューナの口と目が吊り上がる。

満月の下で見るシューナの笑顔は、一瞬で私の目に焼き付けられた。

そして、シューナの言葉に引っかかりを覚え、聞き返そうとしたけれど。

「それでは、また」

ふわりと跳躍し駆け抜けていったシューナに、私が聞き返す時間はなかった。

「……」

私はふう、と息をついて満月を見上げる。

長いようで短くて、夢のようで現実で、おかしいようですぐに馴染める、悲しいようで嬉

しかった一日が終わりを告げて。

私は今日シューナにもらったものを、ずっととっておこうと決めた。

シューナの言う通り、本当は入る事なんて許されなかった世界を覗くことができただけでもラッキーだったんだから、もう我儘は言わないようにしましょう。

本当は、もつと〈猫の家〉を手伝いたかったし、シューナともたくさん話したかったけど。

でも、シューナが言ってくれたから。

「またのお越しを」待っているって。

それは、また私がこの世界に戻ってこられる可能性があるってことだ。

そして、シューナはそれを待っていてくれるってことだ。

お店の人に同じセリフを言われても、そこが遠かったりしたら実際にもう一度来る人は少ないだろう。

同じように、私は、シューナにはああ言ってもらえたけど、本当はもう来られないんだなって思った。

何の根拠も理由もないけど。

でも、シューナが口に出してくれただけでも、また私が来るのを待っているって言うってく

れただけでも、私は嬉しかったから。

だから私は、シューナが走り去った方角に向けて頭を下げると、もう何も言わずに家に帰った。

それから……もういつもなら夜ご飯を食べ終わってお風呂に入ってる時間だったけど、私はそのどちらもせず、まず真っ先に自分の部屋の机に向かって、読書感想文を書き直した。

翌日も、私は商店街まで散歩に行った。

今日もお父さんは仕事、お母さんはまだ帰ってこない。

「あ」

魚屋の前でひっそりと待ち伏せするシューナを見つけ、私は思わずつぶやいた。

ああ、そうだ。

シューナ、って名前は猫からシューナを連想して呟いたのが定着しただけだけど、もっとちゃんとした名前も考えてつけてあげよう。

多分、その名前で呼ぶのは私だけになると思うけど。

何がいいかな、縞模様だから、トラ、シマ、それとも魚屋のおじさんみたいにドラ？

「……いつか、遊びに行ってもいいかな」

形は質問でもほとんど独り言に近い感じで私が言った言葉に、どうやら猫は気づいたみたいでこちらを振り向いた。

でもテレパシーを送ることなく、それ以上こちらを見たりすることもなく、軽やかに魚屋に近づいて行ってしまふ。

人ごみで見えなくなっただけ、やがて魚屋のおじさんの怒鳴り声と走り去る音が聞こえてきたから、きつと今日も上手く盗んだに違いない。

私は思わずクスツと笑ってしまった。

彼が魚を盗む理由を、私だけが知っている。

そしてこの中で彼と話したのも、多分私だけ。

そう思うとなんだか急におかしくなって、クスツ、ではなく、大笑いが込み上げてきた。

私はお腹を抱え、声を出さないようにしながらずっと笑っていた。

また話すのは無理かもしれないけど、これから毎日会えるよね。また手伝いには行けないかもしれないけど、ずっと〈猫の家〉を忘れないよ。

ねえ、だから。

あなたも、私を憶えていてくれるかな？

「——ニヤア」
もちろんだよ

猫は自分が座る塀の前で自分を探して走って行く魚屋の主人を面白そうに眺めながら、その口に出した。

意味を理解する者は周りにはいない。

けれど猫は、別にそれでもよかった。

昨日の事を思い出すと、友里の笑顔が真っ先に浮かぶ。

そして友里に重なるように、シューナの顔が。

あの夜の満月。

(さて、仕事に戻るかな)

ふわふわとあくびを一つして、猫は塀を駆け抜け、屋根に飛び移り、軽々と走る。

猫の肉球のような形の雲が、太陽の光をのんびりと浴びながら、空にポツカリ浮かんでいた。

了